【総評】

総評

金嚅泳（同徳女子大学校）

2015 年は「戦後 70 年、日韓国交回復 50 年」を迎えた年であり、日本と韓国においては大変意味のある年である。実際のところと言ったらおかしいかも知れないが、両国に間ではそれを記念するために様々な行事や交流が行われるはずであった。しかし、歴史問題や領土問題など、政治における問題が次々と起こって両国の関係が極めて冷え込んだせいで、２015 年にはこれといった記念すべき行事があまり行われなかったような気がする。日本と韓国は悲しき過去を克服してこれからはお互い協力して共生の道を歩むべき隣国であって、この様な現実は真に残念なことであり、日本語や日本文化などを大学で教えている個人としても悲しいことである。私はこのような状況の中では民間レベルにおいてでもまずは交流を絶えないようにすることが大事であると考えているし、このような努力が重なって結果を出すことができるのであれば、両国の関係改善のための突破口にもなるのではないかと考えている。

実際に本校、同徳女子大学校・日本語学科は主に日本に携わる人材を育成する教育機関であって、日本との関係が良かった時期でも、また今のように冷え込んだ時期であっても、普段から民間レベルにおける交流を絶えずに行ってきた。例えば、日本のいくつかの大学との交流を活発に行っているし、学生たちが参加できる様々な国際プログラムを企画している。

その中でも同徳女子大学校においてお茶の水女子大学との交流は格別なものであって、年に一度夏休みの期間中に学生交流を順番に開催してきたし、多くの学生も派遣してきた。また、2015 年には今回の 2015 年日韓学生フォーラムを含めて二回にわたって学生交流を行うなど、日本と韓国の学生たちの両国における理解を深めるように努力してきた。特に今回 2015 年の日韓の間で国際学生フォーラムを開催したことは、意味のある年にも関わらず日韓関係が悪化しつつある時点で行われた点で評価できると思われる。

また、今回のフォーラムに参加して下さった日本のお茶の水女子大学の学生の皆さんは、韓国で行う発表や討論のために長い時間を費やしてしっかり準備をしてきて下さった。しかも、えてして感情的になる可能性のある敏感なテーマ、つまり慰安婦や戦争責任など、歴史に関する問題に対しても韓国の学生たちとの交流に誠意を尽くして臨んで下さった。そのようなお茶の水女子大学の学生たちのお陰で、同徳女子大学校の学生たちは　今回のフォーラムに参加することによって大変勉強になったと思うし、具体的には自分の夢と関連付けて日本語を勉強する意味、国際交流の意味、隣国に対するイメージ、これから日本とどのように接していかなければならないか等々、様々な点においても素晴らしい刺激を得ることが出来たと思う。

総評の場を借りて、今回のフォーラムを企画して下さった関係者の皆さん、また参加して下さった学生たちに感謝の気持ちを伝えたい。同徳の学生一同は日本の皆さんの暖かい気持ちと友情を一生忘れないと思う。最後に、いつも誰よりも同徳女子大学校との交流、また韓国との交流のために努力して下さっている森山先生に対し感謝の意を表したい。

総評

魚（オ）　秀禎（スジョン）（啓明大学校）

2015 年６月１日、お茶の水女子大学の森山先生からメールが届いた。その内容は「JENESYS2.0」における韓国との間の招へい・派遣事業の実施団体選定に関する企画競争に公募したいとのことであった。その計画のなかに啓明大学の学生らと交流をしたいとの内容であった。

その前に、私は、2015 年１月に 10 日間、「JENESYS2.0」の事業に参加し、韓国青年訪日研修団の第３団の団長として韓国の大学生を引率し、日本を訪問した。そのとき、日本の外務省をはじめ、鹿児島、熊本、奈良を歩き回りながら日本の文化に接することができた。また、日本の大学生との交流を通じ、若者同士に話し合う機会を持ったり、ホームステイをしながら日本の家庭を自ら体験しながら、大変感動を受けた多くの韓国の大学生をみた。

こういう経験のある私としては「JENESYS2.0」はどれだけ価値のある有益な事業であるかすでに認知していたので森山先生の提案を喜んで受け入れることにした。それから１ヶ月半が経った７月中旬、森山先生から採択されたとの連絡がきた。ところが具体的な日程を確認すると、ちょうど冬休みに入った後で参加希望の学生が少ないのではないか心配であった。しかし、募集をすると、あまりにも多い人数の応募があり、そのニーズの高さにに驚いた。

交流会のテーマは「互いの文化を理解する・互いの文化から学ぶ」であった。多くの応募者から発表者を決め、具体的なテーマは発表者に決めさせた。発表者達は日本の大学生に韓国の伝統文化について発表することを誇りに思いながら、一生懸命準備した。発表者達から、韓国の文化を少しでも多くお茶の水女子大の学生に紹介し、また体験してもらいたい気持ちでいっぱいであることがしみじみ感じられた。

交流会が終わった後、参加した学生に感想を聞いてみたところ、お互いの文化について本ではなく同年代の人から丁寧に紹介してもらい大変勉強になったことはもちろんのこと、同年代の人の考え方を理解でき、今後の交流の拡大に繋がることができて本当によかったと言っていた。何よりも、話し合いができる日本人の友達ができたことが一番よかったという学生が大変多かった。

「JENESYS2.0」の事業に参加した日韓両国の若者たちは今後、日韓の架け橋になることを信じ、今後も継続・拡大することを期待している。

総評

諏訪昭宏（釜山外国語大学校）

今回の国際学生フォーラムで改めて強く考えさせられたことは、国際理解と外国語教育の更なる充実には、「交流」と「討論」の場をより多く提供することが必要であり、教育に携わるものとして今後このような場を作る努力と、その効果を最大限活かすための研究が必要である、ということであった。その理由を所感とともにいかに述べる。

第一に、本大学の参加学生にとって日本語学習への強い動機づけとなったことが挙げられる。参加した本大学学生たちの日本語使用の機会はほぼ授業内のみと限られており、実践を通して自分の日本語を振り返る場に不足している。その点、本フォーラムは、日本人学生との交流や討論を通じ、自分の日本語能力を確認し、更に内省する場となったようである。また、ネイティブと話すことは日本語学習者としては相当な不安を感じものであるが、日本人のやさしさを感じたと言うほど、日本の学生たちは、積極的にかつ思いやりを持って韓国人学生に声をかけ、相手の不安を取り除き、話しやすい雰囲気を提供してくれていたのである。今回の経験は、多少の違いはあれ、今後の日本語学習において強いモチベーションを与えたことは疑いの余地もない。

第二に、本フォーラムの趣旨でもある相互理解が進んだことが挙げられる。釜山では、ソウルの「過去」、大邱の「現在」に続き、「未来」がテーマであった。普段から気にはなってはいるものの、ましてや日本人と語ることはありえない日韓の過去に触れ、そこから未来を語る今回の経験は、どの学生にとっても新鮮で刺激的なものであった。しかし、この問題から目を反らさず真剣に語る日本人学生の姿が韓国人学生にも伝わり、いつしか互いが真剣に語るようになっていた。誰もが両国の関係改善を心から望んでいることを感じ、そこからある種の信頼が生まれたとも言える。多くの学生から「もっと議論する時間を」「今後も活動が続くことを願う」という声が至る所からあがったように、実際、２日目の自由時間では両国の学生たちだけで本音で語り合う時間を自ら設けたほどである。

本大学でも様々な学生交流は行ってきてはいるが、今回ほど学生たちに強い影響を与えられたものは記憶にないと言えるほど素晴らしい時間であった。それは何よりも本フォーラムを企画された森山先生のこれまでの研究・教育活動と教育に対する情熱、そして、学生たちの可能性を信じる心から成し遂げられたことに違いはないと言える。改めて関係者の皆様に感謝の意を意を伝えるとともに、今後も引き続き本フォーラムが開催されることを願うばかりである。その先に、日韓の真の理解と協力が生まれることであろう。

総評

森山新（お茶の水女子大学）

戦後 70 年、日韓国交回復 50 年のこの年、私は２つの日韓合同のＴＶ会議授業と２回の交流イベントを実施してきた。釜山外大、大連理工大との間で実施されたＴＶ会議授業では、前期は過去を見つめ、歴史問題、領土問題、慰安婦問題などを扱い、後期は、教育、経済、その他の分野で、日韓がともに歩む道を模索した。一方、交流イベントとしては、まず８月に第 10 回日韓大学生国際交流セミナーがソウルで行われ、ここでは両国の間に未だ未解決のまま存在する諸問題について、韓国の同徳女子大学校の学生と忌憚のない討論を行い、最後には日韓大学生共同声明を発表した。今回の国際学生フォーラムでは、こうした討論と交流の基盤の上で、学生同士が過去を乗り越え、互いの良き点を学び合い、ともに歩む道を模索した。近年の両国関係が必ずしも良好とは言い難い中、どの授業、どのイベントでも、開始前には、対立が深まるのではないか、討論が成立するのだろうかと言った不安の声も聞かれたし、私自身も主催する者として、正直相当の不安があった。しかし終わってみると、お互いが自身の意見を率直に述べ合うことの重要性と、そのような中でも合意を模索していく対話の意義とを、それぞれの学生が痛感していた。また、マスコミ報道と実際の交流の中で感じたイメージのギャップが少なくないことを実感し、マスコミ報道などにとらわれずに、直接交流していくことの意義を参加者皆が口にしていた。また今回は日韓文化交流基金の助成を受けつつ行われたことで、様々な理由で海外に行く機会に恵まれなかった学生にも参加の機会が与えられたことから、日頃日韓関係に深く関心を持っている学生のみならず、関心を持ちつつも、専攻などの違いから深く考える機会のなかった学生も参加し、日韓交流の輪が大きく拡大したことを実感している。両国関係が真に良好なものとしていくには、両国の国民全体が交流と対話の機会を得ることが何よりも必要である。その意味で、今回は本学の全学部、全学年から 35 名の学生が参加し、韓国側も、ソウルのみならず、大邱、釜山の学生、合わせて 108 名が参加して交流が行われた意義は大きかった。また、日本の学生たちは、ソウルでは韓国のすぐれたＩＴ技術やＫ－ＰＯＰ、慶州では伝統文化、釜山ではかつて日韓をつないだ朝鮮通信使の歴史に触れながら、両国の過去、現在、未来を考える機会が与えられたことは、評価に値すると考えている。

今回、フォーラムが成功裏に終了する中で、戦後 70 年、日韓国交回復 50 年を締めくくることができたことは、日頃、最近の日韓関係の悪化に心を痛める私としては、何よりもの喜びであった。今後、両国関係が少しでも良好なものとなるために、今回参加した日韓両国の若者が両国の架け橋となってくれることを祈ってやまない。

最後になったが、このような機会を与えてくださった、外務省と日韓文化交流基金の関係者の皆様に心より感謝の意を表したい。